第２回県政ひざづめ談議結果概要

〇実施日時：平成２１年４月２８日　１６：００～

〇開催場所：富士河口湖町子ども未来創造館

〔司会〕

それではただいまから『県政ひざづめ談議』を始めさせていただきます。

本日の進行役を務めます県広聴広報課の堀内でございます。よろしくお願いいたします。

まず始めに横内知事からあいさつをお願いいたします。

〔知事〕

どうも皆様こんにちは。

それぞれお忙しい中だと思いますけれども、こうしてお集まりをいただきまして本当にありがとうございます。

本日おいでの皆様方は、それぞれ子育てをやっている最中で大変に日々ご苦労なさっているという方々と、またそういった子育てをするお母さん方を支援なさっている方々もおられると思います。

子育てをやっていく過程でいろんな悩みや、あるいはご要望などがあろうかと思います。今日はそういうことをざっくばらんにお話をいただいて、我々県政にいる立場として最大限皆さんのお役に立ちたいというふうに思っております。

〔司会〕

それではここで本日出席しております県と町の担当者をご紹介させていただきます。

県の少子化対策を担当しております清水理事です。

県で子育て支援などを担当しています清水児童家庭課長です。

富士河口町で子育て支援などを担当しています日原福祉推進課長です。

それでは意見交換に入らさせていただきます。本日は「充実した子育て環境づくりの方策」と、非常に堅苦しい題にはなっておりますけど、普段感じておられることを知事に向けてざっくばらんに発言していただきたいというふうに考えております。対話の時間はおおむね１時間を予定しております。限られた時間の中で皆様方全員が発言できるように是非ともご協力をお願いしたいと思います。

〔知事〕

富士河口湖町にはファミリーサポートセンターがありますけれども、うまく行っているでしょうかね。お使いになっている方々と、それから実際子どもさんをお預かりになる方々といるわけですけれども、使っておられる方々はどうでしょうかね。

〔参加者〕

主人も私も埼玉のほうから仕事の都合で参りまして、どうしても親戚、両親がいないものですから子どもの預け先がないんです。それで登録はさせていただいているんですが、まだちょっと使った経験がないんです。けれど登録しているだけでも大分心強いというか、

何かあった時には町に電話すれば預かってくれる先を見付けて下さるということで、とっても心強いので、この制度とてもいいものだと思っております。

〔知事〕
今働いておられるんですか。

〔参加者〕
いいえ、働いてはいないんですけども、主人がかなり出張を長くしますので、私が体調を崩したりとか、病気のある際には利用したいと思います。

〔知事〕
お子様は何人おられるんですか。

〔参加者〕
２人で、４歳と、まだ９カ月なんです。

〔知事〕
それは手間が掛かりますね。それじゃそういう子育てをしているお母さん方と一緒に集まっていろんなサークルを作っておやりになっているんでしょうね。

〔参加者〕
こちらの２名の方とサークルに参加させていただいています。
「ちびっ子プレイパーク」というサークルです。

〔知事〕
「ちびっ子プレイパーク」というのは横浜に「プレイパーク」というのがあって、それを参考に、お作りになったということのようですね。

〔参加者〕
自分もやはり河口湖から横浜という全然だれも知らない所へ行ったもので、話し相手とか子どもと接してくれる方とか、おじいちゃん、おばあちゃんの代わりになるような方とかを求めたというところですね。まだ上の子どもだけだったので二人で煮詰まってしまって・・。

〔知事〕
そうでしょうね、知らない土地に行きますと。

〔参加者〕
横浜には、地区センターという所がありまして、こちらの施設のような所です。すぐ近くに公園があって、有償ボランティアをしている方が世話人という形で子どもを遊ばせな

がら、面倒みてくださるんです。小学校の子とか中学校の子もいるんですけど、まだ生まれてすぐの子も外に出してみんなで遊ぼうという感じで、すごく助かりました。

〔知事〕
それで今、こちらに帰ってこられてそういうものをお作りになった・・。

〔参加者〕
横浜のプレイパークはＮＰＯで活動しているもので、私一人ではとてもできないのですが、町で開催してくれた親子ママビクスに参加したときにたまたま知り合って・・。

〔知事〕
そして気が合って・・。

〔参加者〕
子どものほうが合ったのかな。大人ってやっぱり最初緊張しちゃうんですけど、子どもはね、初めてなのに二人でどんどん行ってしまって。その教室が終わった後もずっと遊んでいて、その間に私たちはプレイパークの話をしたんです。

〔知事〕
今はメンバーが２０人、子どもさんが２８人でやっているんですね。

〔参加者〕
実際のところイベントにはそのぐらい来て下さります。今日も火曜日だったのであったんですけど。

〔知事〕
毎週一回、火曜日に集まるんですね。

〔参加者〕
はい、今度土曜日も集まるようにしました。

〔知事〕
ここに集まるんですか。

〔参加者〕
河口湖の総合公園です。ステラシアター。

〔知事〕
冬は困るじゃないですかね。

〔参加者〕
　冬はこちらにお世話になっています（笑い）。冬は一応休止ということになっているんですけど、大体同じメンバーでここに集まったりします。

〔知事〕
　それはいいことですよね。それで集まって子どもさんたちを遊ばせるのにだれかボランティアの方が付いてくれるんですか。

〔参加者〕
　本当は欲しいんですけど（笑い）。やはりこの地域柄仕事をされている方が多いんですよね。観光地なので、おじいちゃん、おばあちゃんも仕事をしているという現状で、ボランティアはなかなか無理なので自分たちで自主運営です（笑い）。

〔知事〕
　「魔女の宅急便」グループも「ＦＫはんず」も大体同じような活動でしょうかね。

〔参加者〕
　「魔女の宅急便」は絵本の読み聞かせボランティアでして、地域の保育園だとか幼稚園、あとは小学校など、その他色々頼まれたら馳せ参じるみたいな形で出張型の活動をしています。

〔知事〕
　読み聞かせグループでね。１００名前後のお母さん方と０～３歳児の子どもさんたちが集まってくれて毎月１回やっておられるとここに書いてありますね。

〔参加者〕
　それはこちらで行っている固定型の読み聞かせです。「うさぎの親子」という活動なんですけど、日本語を媒体としたものと英語を媒体にしたものを、第２週目、第４週目に、月１回ずつそこの大きな図書エリアにある子育て学習室で開催しています。「魔女の宅急便」のほうは出張型なんです。両方掛け持ちしている感じで・・。

〔知事〕
　「魔女の宅急便」は年３０回（Ｈ１９年度）とか、ずいぶん活発ですね。あちこちから頼まれるわけですね。

〔参加者〕
　年４０回ぐらいです。
　最初の年は何件かお伺いを立てて行ったんですけど、あと何か口コミで広がっていって。年度はじめに案内を印刷してファックスとか郵送させてもらって、その返事が来たものはほとんど受入れる状態なので回数が多くなりますね。

〔知事〕
童話を読み聞かせるんでしょう。
読み方がうまいんですね。

〔参加者〕
そういうことではないんですが（笑い）。基本は絵本を手に取ってもらうためで、こんな物語があるよというご紹介なんです。けれど、生徒さんとか園児数が多くなると遠くのほうまで見えないということもあって、大型絵本を使うなど、絵本を大型化して演じることもあります。
ただパフォーマンスを売りとするのではなく、読み聞かす原点というのは「お母さんのおひざに抱っこして読んでもらうということ」との位置付けでやっています。たまたま見えないから大きくやるだけで、お家に帰って「今日はこんなお話してもらったよ」と言って、またその本を図書館に借りに来て、お母さんと一緒に本を読む、とそういう形に連動してもらえばいいなというのが基本の姿勢です。

〔知事〕
なるほどね、そうですか。ずいぶん活発ですよね。
「ＦＫはんず」というのはどういうものですか。

〔参加者〕
「ＦＫはんず」は、この建物ですね、生涯学習館の計画が決まった年に子育てサポーターリーダー養成講座を受講したメンバーの中から優秀なボランティアが集まって作ったグループです。ですのでここの施設が出来上がる時から「どんなふうに利用していったらいいんだろうか」とかということを町の職員の方々と一緒に意見を出し合いながら進めてきました。
実際にここが出来上がってからは、オープニングイベントから、ほぼ月に１回ずつ未就学児から小学生ぐらいまでを主な参加者として、また、中学生、高校生はボランティアでお手伝いしていただく対象としてイベントを開催しています。クリスマスとかハローウィンとか、人気のあるイベントには１回のイベントに３００人ぐらい集まったりというような状況でやっております。

〔知事〕
そうですか。ここは立派ないい建物ですよね。実によくできているなと思いますね。山梨県内でもこういうものは珍しいんじゃないでしょうかね。
また回りが全部木でできているのがいいですね。

〔参加者〕
県産材でね。

〔知事〕
　それで奥さん方がいろんなイベントを企画して、ここで行っているのですね。
　さて、それで本題に入って子育てに関連しまして何かこうしたほうがいいんじゃないかというようなことありませんでしょうか。

〔参加者〕
　今日は子育てというテーマですけど、私たちは子育てというと成人するまで、中学生、高校生も含んでというふうに考えるんですけれども、今回その範囲でお話をするということであれば生涯学習課の方とか、学校教育課の方とか、そういう方にも是非来ていただきたかったなというふうに思います。

〔知事〕
　子育てというと、確かに未就学児あるいは小学校低学年、学童保育、児童館、そのぐらいのものを考えるんですが、しかしもっと上でもいいですよ。むしろ教育の問題になりますよね。

〔参加者〕
　教育だけではなく、子育てということでいえば、先日新聞にも出ましたけど「しつけは学校ですべきだ」というような親の意見が半数だなんていう山梨県の状況があったりします。多分小学生だけではなく中学生、高校生、大学生になってもしつけの部分というのはずっと影響してくることでしょうね。

〔知事〕
　それはそうですね。ご意見を是非言ってみて下さい。

〔参加者〕
　しつけを半分の人は学校でしてもらいたいというふうに言っていることがありますので、学校側と地域側とよく協力をして話し合っていかなければならないと思います。それと同時に不登校率が山梨県がワースト１だったという非常に不名誉な実態もありますが、地域と学校が密着しているような環境が逆に悪いんではないかというふうな所が多々私には感じられるんですね。

〔知事〕
　地域と学校が密着し過ぎている。

〔参加者〕
　そうですね。ある意味癒着じゃないですけれども、地域と学校があまりにも密接過ぎて何か言うと地域で仲間外れにされてしまうので言えないという状況があると思います。

〔知事〕
学校に文句を言えない、そういうところがありますか。

〔参加者〕
幾つか実際に聞いているところでは、そこで言ってしまうとここの地域に住んでいられなくなるということで、教育委員会や学校に直接「この先生をもうちょっとこうして欲しい」とか、困っているということを言えないというようなことを聞いています。そういうことは本来市町村に言って、そこがだめだったら県、ということになるのかもしれないんですけど、地元と密着し過ぎていて言えないというのが、多分この地域の特徴なんではないかなというふうに思います。

〔知事〕
確かにおっしゃるように山梨は割と狭い社会ですからね。そういう中で、ある意味ではコミュニティがあるということなんですけれども、あまりそこでシビアなことは言わないで、なあなあで一つ穏便に済ませようという感じはありますね。だからそこで厳しいことを言うと何となく仲間外れにされちゃうということはあるかもしれませんね。

〔参加者〕
その辺をうまく解決できるようなことを全県挙げて取り組んでいただきたいですね。不登校の子どもを含め、いろんな教育とか子育てについても。

〔知事〕
あまりモンスターペアレントみたいな人ばかり多くなると困るけども（笑い）。やっぱり教育についての注文というのは、当然のことながら学校の先生方にＰＴＡとかいろんな話し合いの場で言うべきことはきちっと言わなきゃいけませんね。

〔参加者〕
それが言えないというところが問題なんですね。

〔知事〕
あなたはそういう経験していますか。

〔参加者〕
私自身はよそからこの地域へ来て１０数年住んでいるという人間です。積極的に係わらせてはいただいていますが、そんなに地元に密着をしていないというか、「そこにいられなくなったらどうしよう」とか、そういうことは感じないので、言うべきことは言います。
けれどもそこにお家があって、ご主人もそこの出身で、おばあちゃんもそこにいて、となると、そんなこと言ったらここに住んでいられなくなるというふうにおっしゃるお母さん方というのは結構いらっしゃいます。そういうところを聞き出せる仕組み、もしくはちゃんとどこかに伝えられるような仕組みを作っていかないと、と思います。

不登校の問題というのは、もちろん子どもの問題もあるし、親の問題もあるし、学校の問題もあると思うんですね。どこに問題があるか分からないけれども、それをきちんとつかめるように、そして誰でもちゃんと声が上げられるような環境がうまく作れていけるといいなというふうに思うんですね。

〔知事〕
そうですか。例えば山梨の、今のこの地域の学校についてでもいいんですけども、こういう点は改善すべきだというようなことはありますか。

〔参加者〕
これは聞いた話なんですけど、僻地校扱いになっているような所は特に先生の異動が少ないように聞いているんですね。そうするとそういう所ほど何か問題があった時には言えない状況が起きているようです。僻地校であってもある程度は先生を循環していただくというのは一つの方法ではないかなと思うんです。
あとは非常に少人数の学校もあったりします。地域のお年寄りたちは自分の通った学校がなくなるということには非常に抵抗を感じますし、子どもたちが歩いていけることが一番いいかもしれません。また学校があることでそこにコミュニティが一つ存在するということになると思いますが、昔の村の意識にとらわれず全町で一つのコミュニティができるぐらいの気持ちになって、保育所でも学校でも統廃合ということも含めある程度大きな規模の形をとって、その分スクールバスで賄うとかのほうがトータル的にみると子どもにとってはいいんじゃないかなというふうに思います。

〔知事〕
確かにね。あまり小さい学校のままでは何かぬるま湯につかったような格好でね。割と山梨県の小学校は過疎地域が多いこともありますから小さいんですよね。
小学校の間というのは義務教育でもありますからぬくぬくといくんですが、中学に入ったとたんに高校教育とか、高校受験とかを意識するでしょう。厳しくなったり、学校も大きくなるものだから、不登校とか、そういうことが起こってくるんじゃないかという気もしますよね。しかし確かに学校に注文をつけられない雰囲気があるというのは問題ですよね。これは何か考えなきゃいけませんね。
ほかにいかがでしょうかね。

〔参加者〕
私はもう子どもが２５歳と２６歳なのですが下の子は障害者なものですからどっちかというと子育てというより福祉のほうですね。
福祉のことで感じるのは郡内と国中地方と格差が実に激しいんですね。郡内のほうで声を上げたとしても県のほうに届かない。要望を伝えているはずなんですけども郡内のほうからは声が来ませんというふうに福祉のほうから言われるということがありました。子どもは普通学級から「ふじざくら支援学校」の中学部、高等部へ行って、そして今は福祉作業所へ行っています。その支援学校の中学部にいた時に郡内からは何も声が上がりません

と、県の教育委員会にも、福祉課のほうにも伺いました。親御さんの結束力が少ないのかということもあったんでしょうけど。今福祉のほうが支援費から自立支援にと変わっているんですけど、やはり格差がかなりある。

〔知事〕
障害者対策について格差が大きいという話はよく伝わってきますよ。例えばこちらからあけぼの支援学校とかまで送り迎えをしたりしていて大変だという話もよく聞きますよね。それは改善をしなければいけないと思っているんですけどね。

〔清水理事〕
会合やなんかでもこちらのようにお子さんを連れていくのは大変なのでというふうなお話は聞いて、検討が少し始まっています。

〔知事〕
具体的に例えばどういうふうな施設があることが望ましいですか。

〔参加者〕
医療・・なんですね。歯のことにしても、こちらの地域で一般の所で診ていただける障害者はいいんですけど、知的とか重度の方とか、かなり癖があれば一般の歯科医から拒否される場合がある。だから今共立病院か県のほうへ行っている方がいて、その道中のほうが大変でほとんど行けないと。重度の方がかなり多いので医療面に関しての相談窓口みたいなものがこちらにあれば、と思う。
麻痺をしている、知的に重度の障害があるとなるとやはりサポートがちゃんと必要なんです。
学校の関係ですと、今どうなったかということは私も子どもが学校を卒業しましたから分からないんですけど、聴覚に障害がある方が行く学校も少なくなったから統合するという話をちょっと聞いたことがあったんです。聴覚障害と視覚障害の方では勉強することも全然違いますので、聴覚の方から統合されたら困るというお話も聞いたことがあります。

〔知事〕
確かに郡内と国中の格差というようなことは実際ありましてね。医療の問題がありますし、道路なんかにしてもそうですけども、障害者福祉の問題にもあるというんですよね。これは改善をしていかなければいけないと思っておりまして、どういう点が必要なのか、どういう施設なりサービスが必要なのか、一度きちっと調べてみたいと思いますけどね。よく調べて、できるだけ改善するようにしますから、またその時には教えて下さい。何か福祉団体に入っておられますか。

〔参加者〕
ここの地域には郡内には福祉作業所に通っている人と学校に通っている子どもの保護者会の「ひつじ」という団体があります。そちらのほうで県に申請したり、富士吉田市以下

かなりの市町村にいろんな要望をしています。県にも富士吉田市をとおして最重度の方の親御さんから要望がいっているはずなんです。いろんな団体があるんですが、是非よろしくお願いいたします。

〔知事〕
分かりました。これはよく検討してみますから。ありがとうございましたね。

〔参加者〕
この辺だとちょっと離れた所で、車で移動しないと行けない大きい公園が多いので、それが結構大変です。できれば近場に遊べる公園がほしいです。

〔知事〕
子どもたちを遊ばせられるような。

〔参加者〕
そうですね。ステラシアターの所のちびっこ広場というのが一番大きい公園なんですけど、車で移動しないとちょっと行けないんです。
そこの遊具、滑り台とかあるんですけど、夏は夏ですごい日が当たり過ぎて熱くて使えないんですよね、公園なので屋根が付かないのはしょうがないんですけど。もうちょっと近場に、近場というか町中にできると助かるかなと。
２歳とか３歳とかになれば車に乗せて行くにも楽ですけど、下の子が生まれたりとかすると、その下の子を連れて車に乗せてわざわざ行くわけにはちょっといかないので、できれば近い所にあるといいのですが。

〔知事〕
近い所にね、児童公園ですね。

〔参加者〕
あとそれに加えて水遊びができる場所があるといいのですが・・。
この辺だと忍野まで行かないとないんです。ここも湧水とか豊富なので、ちょっと夏だけでもいいので、水でチャプチャプできるところがほしいです。

〔知事〕
チャブチャブ池みたいなものですね。大月にウェルネスパークってありますよね、あそこにそういうのを造ったんです。

〔参加者〕
一昨日行ってきましたからね。

〔知事〕
こっちにもあるといいですね。

〔参加者〕
砂場の上に屋根が欲しいという話ですが、うちの「ちびっ子プレイパーク」から昨年河口湖町のほうにはお話をしてあります。昨年のことなのでまだ予算とか立ってないかもしれないんですけど、していただけるようなことを言っていただいたんですが・・。

〔日原 富士河口湖町福祉推進課長〕
去年の県の部長さんとのお話の時に、うちの係長が確かにお話を聞いております。あそこは都市整備課の担当ですので、担当課のほうには話をしてあるはずです。その後のことについてはまた確認させていただきます。

〔参加者〕
はい、先ほどの水遊び場と一緒に（笑い）、よろしくお願いします。

〔知事〕
なかなか町も財政が厳しいですからね。皆様全てがすぐ歩いていける所に児童公園を造るなんて、これも大変だしね。やっぱり子どもさんを遊ばすことができる芝生みたいなところがあるといいということなんですね。

〔参加者〕
理想で言えば家からベビーカーで散歩して行ける公園、東京とか、都会には結構あると思うんですよ。

〔知事〕
やっぱり人口が集まっているからね。

〔参加者〕
そうですね、人口的に難しいとは思うのですが・・。

〔参加者〕
空いている所に、ちょっと乗れるブランコが２台とか、滑り台とかがちょこちょことあるという・・。

〔知事〕
団地に住んでいると、団地には必ずあるんですよね。

〔参加者〕
あとその子ども関連ですが、この未来創造館は富士河口湖町の建物ですよね。なので町

外の方は町内の人と来ないと利用ができないんです。図書館は大丈夫なんですけど、こちらの施設はできないことになっているんです。今日話を聞いたんですけど、火曜日だったのでちびっ子広場に参加していた人が、自分は富士吉田市なんだけど、ここへ自分だけで行ったときは中に入れなかった、なんて言っていました。町内の人と一緒に行けば入れるからという話をしたんですけど、やはり子どもがいると時間というのはなかなか一緒にできないこともあるので、自分の空いた時間に行けるように、多少お金が掛かってもいいので利用させていただきたいと。市町村の壁をどうにかならないのかと思いました。富士吉田市には室内で遊ぶ所が実際なくて、富士吉田市の方たちも困っているようなんです。サークルも困っているようです。

〔知事〕
吉田にはないんでしょうかね、こういうのがね。

〔参加者〕
あすみのコミュニティーセンターでここと同じように月・水・金かな、そしてあと火・木はまた違う所でやっています。保育士さんもそこにはちゃんと付いてやっているし・・。

〔知事〕
ここは富士河口湖町のものですから富士吉田市の人がどんどん使うというわけにもいかんですが。

〔参加者〕
ここはやっぱり魅力的なようです。お金を払って行くのは仕方がないと言っていました。

〔参加者〕
みんないいなと言います。

〔知事〕
富士吉田市長さんによく言っておきます（笑い）、こういうのを造ったらと。
そちらの方、いかがですか。

〔参加者〕
働くお母さんたちを支援するのは、もちろんすごく大切だと思いますけど、行き過ぎたサポートをすると子育てを放棄するというか、人任せになるような感じがしたりします。主人の仕事の関係で５年ぐらいアメリカに子どもを連れて、住んでいたことがあるんです。向こうは働くお母さんがたくさんいるんですが、もちろんコミュニティもすごく助けてくれて色んなことはするんですけれども、働いているお母さんでも時間になると子どもを連れて帰る。その後は自分たちでベビーシッターを頼んだり、夫婦でうまくやったりしています。働いていることに甘んじることなく、働くのが当たり前でも子育ては子育てという考え方を見てきたので、そんなにすべてを何でもかんでも提供してあげるのが子育て支援

ではないような気がするんです。
　サポートはもちろんするんだけども、行き過ぎたサポートは、「多分誰かがやってくれるんだろう」と母親の意識を下げてしまうような気がします。そういうところでもっとサポートの仕方というか考えた方がいいと思います。「言われたからすべて提供する」では、うまく行かないのかなと思ったりしています。

〔知事〕
　なるほど、確かにそうかもしれませんね。私どもはやっぱりできれば延長保育も朝７時半から夕方６時半じゃなくて、もっとあと３０分か１時間ぐらい伸ばせんだろうかとか、色々なそういうサービスの充実を考えますけどね。あまりやり過ぎてもうまくないですかね。

〔参加者〕
　そうですね。アメリカの人たちは夫婦で働いている人がたくさんいますが、だけどみんなそれぞれ自分の責任で子どもを育てています。もちろん地域は地域でサポートはしていました。例えば障害の子がいる時は、カウンセリングをしてくれる人と子どもの勉強をサポートする人、家族をサポートする人が必ず地域にいます。そういう形でサポートしてくれるんですけど、そんなにすべてをやるようなシステムじゃなかったと思います。それでもちゃんと成り立って子育てをするという環境になっているので、与え過ぎてもどうかなと思います。
　スポーツ少年団とかをうちの子どもがやっているんですけど、やっぱり「誰かのお母さんがやってくれるんだろう」となるんです、働いているお母さんは。自分の子どものことなんですけど、もうそれで慣れてきてしまっているのか、「やってくれる人がいるからいいだろう」と思っている。だけど子どもは寂しいんです、自分の親は来ないから。子どもの試合があってもお母さんは来ない。土曜日日曜日でも来ないです。子どもとうまく係われなくなっているのかなと思ったりします。また、休日しかできない買い物に行ったりとかします。子どもが逆にさみしい思いをする場面によく出くわしたりするので、どこまでをサポートをしてあげるのかというのが、すごく大事なのかなって思ったりします。

〔知事〕
　アメリカの場合にはやっぱりそういうことはボランティアですか。それともその地域の市町村ですか。

〔参加者〕
　コミュニティがやっていました。

〔知事〕
　コミュニティがやる、ああそうなんですか。

〔参加者〕
　コミュニティもしっかりやって、幼稚園とかに障害の子どもがいると先生がまずそれを察知してくれて、コミュニティで、そこの市役所みたいな所に行くと紹介してくれます。そして何回か面接をして、子どもがどの人だったらいいか決めます。

〔知事〕
　なるほどね。本当に困った人には助けるんですね、かなり徹底してね。

〔参加者〕
　しかもそれは無料でした。週に２回必ず来て便利でした。

〔知事〕
　難しいですね。確かにあまり何でもかんでも公共が、行政がサービスを充実すればいいというものじゃないですよね、確かにね。

〔参加者〕
　ある程度親の責任のことはやっていましたから、そこから先は自分でベビーシッターを頼むとか、そういう形で。まあベビーシッターとかという制度がないので、そこはやっぱりうまくしなくてはいけないんですけど・・。

〔知事〕
　まあベビーシッター代わりがファミリー・サポート・センターなんですけどね。

〔参加者〕
　これも急に子どもが病気になったからお願いしますというわけには。前に何回か面接して会わなきゃいけなんですよね。

〔参加者〕
　でもそれはちゃんと面接をして、よくお互いに分かっていれば、突然の、例えば「今朝熱を出したから、この１時間をお願いします」でも、それは可能になっているんです。

〔参加者〕
　それは登録をしますよね。その前に面接をじゃあお願いしますと始めから言っておかなきゃいけないということで・・。

〔参加者〕
　というか、いや最初の時点で、そこでファミリーサポートさんを選んでいただいて、まず先に面接をするんですよね。一人だと役に立たないので大体二人ぐらい、二人か三人の預かる側と預ける側との面接をして、この三人なり二人なりがサポート体制を取って、そういう緊急の場合でも対応するというのが仕組みで出来ています。確かに先に面接をしな

いともちろん無理ですよね。面接する前に登録をしなきゃいけないんです。だからそれを登録した時点で面接がありますので・・。

〔参加者〕
登録した時点で何人かにもうすぐ会うんですか。

〔参加者〕
そうです、すぐ会います。私は預かる会員専門なんですけれども、例えば昨日登録した人が今日会いたいからというのも実際ありましたし、だから全然問題はないのです。というかこれはあくまでもシステムですので、お金のやり取りがここでは必ず発生するので、もう事前に担当者の方と面接を受けるということはまず一つの規則です。これは問題ないと思います。先に面接をしているはずですので。
だから私は専業主婦なので朝の６時から本当に夜までいつでもＯＫですよという感じで面接した方にお話をしてあります。そして緊急の場合は、本当はファミリーサポートの方を通さなければいけないんですけれども、個人的でもいいという話をその面接者に話をしていますので、それはクリアできる問題だと思います。

〔参加者〕
登録をして面接をして、その間別にずっと間が空いても、言えばそのままということですか。

〔参加者〕
全然問題ないです。大丈夫です。やっぱり一人というのは難しいですね。私自信も急に病気になったりもしましたから。そういうシステム体制はできています。ただ残念ながら一年半前に一番最初に登録にしているんですけど一度も預かることがないのです。

〔知事〕
預かりがないんですか。まだ預かったことないんですか。それはもったいないですね。

〔参加者〕
こっち側から緊急に何かあった時に頼むという感じなので、多分なければ頼まないと思いますし、他の方を面接すればそちらに行く場合もありますからね。

〔参加者〕
だからそうやって暇な会員も本当にたくさんいます（笑い）。

〔知事〕
それをここではお助け会員と言うでしょう。

〔参加者〕
　そうです、お助け会員。

〔知事〕
　お助け会員は何人ぐらいおられるんですか。

〔参加者〕
　１００何人います。そして面接もかなりしているんですけども・・。

〔知事〕
　だけどおっしゃったように、やっぱりなかなか実際に預けるという必要があまりないということでしょうかね。

〔参加者〕
　主人が製造業でして、今このご時世で、主人の仕事が暇なので家事をやって面倒見てもらっています。登録した時はものすごく忙しくてお願いしていたのですけど、下の子が小さかったので心強いなと思って登録はしたのですけど、実際のところまだお願いする機会がなくて・・。

〔知事〕
　そうですか、なるほどね。

〔参加者〕
　でもね、私なんかも子育ての助けをしたいという気持ちで登録して張り切っているんですが、確かにそういうことは一回も経験しません。私から、「町でこういうサポートがあってとってもいいのよ。お宅は小さい子が二人いて、旦那さんが遠距離で勤めているし、いざ何かという時には役場のそういう支援策を大いに利用したほうがいいのよ」と言ったんですよ。そしたら「そうですね」とは言ったけど、何も申し込まないので「どうして」と言いましたらね、「やっぱり不安だ」と言うんですよね。なかなか正しく理解してくれず、サポート隊がいかに勉強して完璧に体制を整えていてもそれが分からないですね。
　この町の支援策というのは本当に恵まれていると私は思います。私なんか古い人間ですからね、ここまでやってくれるのかと思います。平成１３年から０歳児の保育が始まりましたね。保育士さんとかの専門家の会合に行きましてね、いろんな意見を聞きながら、「お母さんはできるならば赤ちゃんを産んだら１年ぐらいは自分のおっぱいで育てれば。今は育児休暇もあるしね」なんてふと意見を言いましたら叱られました。「違います。今はそんなお母さんに任せたらちゃんとした赤ちゃんを育てられない。私どもは子どもさんを、赤ちゃんを預かると同時に、そのお母さんを教育してますよ」と、立派な先生に言われましてね、ああそういう時代なのか、そう思いました。

〔知事〕
確かにそれはあるかもしれませんね、核家族ですから。昔はおじいさん、おばあさんが近くにおりましたからね、色々と教えたんでしょうけど、確かにね。

〔参加者〕
あちらで言われたように、やっぱり、ただ支援するのがいいのか・・。

〔知事〕
難しいですね。まったく。

〔参加者〕
パパの支援をまず借りて・・（笑い）

〔知事〕
それは理想ですね。

〔参加者〕
前にこういうことがあったんですよね。この未来創造館で曜日分けでいろんなサポートがあるんです。ただ、休みの曜日があって、毎日来ていたお母さんの中に「今日は何もやってないから、ここに来ても友達とも遊べないし、ここに来られないと困っちゃうのよね」というお母さんがいらっしゃいました。でも私もその時に先ほどの方のような気持ちになったんですね。やはり子育てというのは、お母さんが自分で子どもを育てることがまずメインで、それをサポートする。そしてお母さん一人で子育てをして、子育てのノイローゼとかになる前に、発散する場所でサポートするということだと思うんです。お母さん同士で何か話ができるという、それもいいと思うんですよ、逃げ道があって。
でもそれが全てじゃない。やはり子育ては自分で育てることだと思うんですよね。やはりそこのところの行き過ぎというのか、ラインを引くのは難しいと思うんですけれど。子どもさんを育てるサポートは富士河口湖町には結構あるかと思うんですね。それより、お母さんの心の拠り所のサポートというのがもっとあったらどうかなと。お母さんサークルみたいな、もっと気楽に同じぐらいの年齢の子どもを抱えたお母さん同士が集まる、そういうサークル的なものがあっていいと思います。あまり意見を言えない人でも、そこで話を聞くだけでも、「あっ私だけじゃなかった」と、ほっとした気持ちで帰って、また子育てに向かえるという、そういうお母さんの心のケアみたいなものも子育てサポートの一つだと思うんですよね。子どもさんを遊ばせるだけではなくて、心の支援も何か必要だと思います。

〔知事〕
確かに皆さん方は積極的な人柄の方が多いからそういうサークルを作ったりしてやるんでしょうけど、中には気の弱い人なんかなかなかそういうサークルなんかに参加できなくて、一人で色々悩んだりしている、育児を悩んでいるようなお母さん方も多いんでしょう

ね。そういう人たちに積極的に働きかけていければ、実際参加してみるとこれは非常に良かったということになるんでしょうけどね。そうですね。

〔参加者〕
確かに出てきて利用するお母さん方って、他のイベントや何かでもお見受けするんですね。だから出掛けられるお母さんの子どもたちはやっぱり方々に出掛けるらしくて、積極的に交流したり、そういうことがすごく多々あるというような感じです。
「この人見かけないな」という方を、病院では見ることが多いんです。数少ない経験なんですが何かふさぎこんでいる人がいて、虐待話みたいなのを私にし始めたんですよね。

〔知事〕
虐待というのは自分が虐待をするんですか、子どもを。それはいけませんね。

〔参加者〕
それは１０年ぐらい前だったんですけど、そういう子育てサークルみたいなところはやっぱり積極的な方が多いんですが、例えば病院みたいなところで必要にかられて出掛けるような所では、悩んでいる人がいて、きっと今後も誰にもこの話をしないで、そしてどこにも出掛けないでいるような人が居たりした時に、私も小さい子どもを抱えているから、それでもう今生の別れみたいになっちゃうじゃないですか。連絡先も分からないし、あの人今どうしているのかななんて思ったりするんです。
当時通告義務みたいな制度がなかった時なんですね。もちろん保育士とか学校現場とか福祉の現場であったらもちろん通告しなければいけないんですけど、一市民でそういうことを聞いてしまった時に、本当に今後悔しているんです。やっぱり時々垣間見られるそういう人たちは氷山の一角なんだろうなと・・。

〔知事〕
そうですね。かなりいるんじゃないですかね。半分まではいかんまでも、３分の１ぐらいは何にもそういうものに参加しないで一人で子育てしているような人がいるんじゃないでしょうか。

〔参加者〕
そして郡内地方の方が統計で虐待の確率が高いというのもありましたし、そういう提供する側は何か自己満足で終わらないようにすればと思います。

〔知事〕
本当にその通りですね。
いかがですか。

〔参加者〕
ちょっと閉鎖的な部分もあるのかなと思うんですね。その郡内の色々何て言うんですか、

先ほど言われたように村八分にされたりとか、そういう所に溶け込めないような人たちとか、その人たちがどんどん内に入っちゃって、そういう状況になっちゃうのかなとか思っております。

私は、今読み聞かせをやっているんですけれど、そういう所まで目が行くということはなかなかないんですよね。自分も子どもとは手が離れてしまっていて、小さいお子さんたちを連れたお母さんたちを見るのは、集まってくれた人を見るだけでという感じで、そういうところを把握できないことがあるんですよね。

〔参加者〕

あときっと、ちょっと田舎の方になると大家族というか、核家族じゃないのでおじいちゃん、おばあちゃんが必ずいて、農業とかやっているような家族じゃないですかね。

〔知事〕

そうですね。そういうところはそれはそれでもいいですよね。

〔参加者〕

確かにさっきおっしゃるような、すぐ行けるような公園はいっぱいあるんですよ、周りに。でも、子どもが小さい時に行くんですが人に会ったことない。ほとんど会ったことないです。こちらはやっぱりすごい出会いを求めて行くんですけど、やっぱり会わないんですね。じゃあ何をしているのかなといつも思っていました。皆さんはどこで何をしているんだろうと。

やっぱりお家が広いですよね。お家が広いということで、畑があったり何なりいっぱいありますよね。多分だから事欠かないとか、そういう遊ぶ所に事欠かない。

結局、都会と反対の何か悩みというんですかね。じゃあどこかそうやってお友達になれるというところもまた少なくて、家で悶々として子どもを育てている。それでやっぱりいろんなことを自分でも思うんですけど発言するとやっぱり嫁なので余計なことを言えないみたいなところもあったりします。地域で悩み事は違うかなと思ってます。

〔参加者〕

町の保健課でやっている乳幼児健診に行って、やっぱり半分以上の方が皆さん顔見知りなんですよね。小学校、幼稚園で同級だったりとか、高校の時に同級だったとかというふうなんです。あとの半分がやはり、多分ここにいらっしゃる方皆さんそうだと思うんですけど外から来た人間が多くて、明らかに見て分かるんですね、「外の人」だなと。そうするとお友達もいないし、ほとんど多分近所とのお付き合いがないんです。

そういうのを見ると、私なんかおせっかいなものでついつい声を掛けていくんですけども、ちょっと声を掛けると本当にぱーっといろんな不満とか不安とかが出て来て、それを機に隣の方が「あっ実は私も」ということもあります。

ボランティアではなく、みんなが必ず参加する、法的にみんなが参加するであろう、ああいう所を利用したらいいと思います。しかも保健師さんもいらっしゃいますし。公務員の方を前にして大変申し訳ないんですけど、私、民間で仕事をしていた時から比べると多

分ぬるい仕事をしているような気がするんです。
　せっかくなので私みたいなボランティアの無責任な人間が参加するんではなくて、保健師さん看護師さんなりの方がそういったのを発見していただいてお話を聞くという場が大切だと思います。育児学級ってやっぱり一番いいと思うんですね。

〔知事〕
　そうですね、育児学級ってあるんですね。これはどのぐらい、子どもが何歳ぐらいまでですか。

〔参加者〕
　２カ月から３カ月ぐらいの頃、また６カ月頃や１０カ月くらいにも健診があったと思います。多分皆さん参加なさると思います。私みたいな人間が見ても「あっこの人はちょっとふさぎこんでいるな」というのはすごく分かることですので、せっかくなので保健師さんがあんなに揃っていますので、少しやっていただければ、埋もれてしまっている社交的にちょっと向いてない方たちも少しはフォローできるんじゃないかなという気がします。

〔知事〕
　確かにね。奥さんのようにおせっかい（笑い）がありますといいですね。

〔参加者〕
　ついおせっかいなもので、言っちゃうんですけど。

〔知事〕
　こういうサークルがありますから来ませんかとか、あるいはそういうＰＲ、パンフレットみたいなものをね・・。

〔参加者〕
　いろんなことを各県でもたくさんのことを、子育ての支援ということをやって下さっていると思うんですけど、実際あまり皆さん知らないことが多いんですね。だからもっと情報がうまく行き渡るような方法を取っていただけるとすごくありがたいなと思います。
　私は３人子どもがいるんですが、３人子どもがいると何か特典というのがありましたよね。だけどそのカードの使い方とかももちろんあまりよく分からないです。

〔参加者〕
　連絡が広報だけなんですよね。

〔知事〕
　広報紙、町の広報紙ですね。

〔参加者〕
広報に何々がありますとか書いてはあるんですけど、まず窓口に来て下さいというのが難点なので。広報も本当によく読まないと分からないです。

〔参加者〕
一番ありがたいなと思うのは、高校生ぐらいまでの子育てをしている人たちのみに向けた広報を県から出してもらえれば。例えば、新しい公園の紹介や、また、不登校に関することとか、そういう情報を盛り込みながら子育て用の広報みたいなものがあればと思います。普通の広報より、子育てをしている人はそういうものに食いつくと思うんです。

〔知事〕
そうですね、子育てをしているお母さん方というのは分かるわけだから・・。

〔清水児童家庭課長〕
妊娠して母子手帳をもらう時にこういう冊子を配っています。ですから子どもさんのいる方については全員にお配りしているはずなんですけども。

〔参加者〕
これはいただくんですけど、行事とか、こういう教室を開きますとかという情報が全部書いてあるわけじゃないし、日にちはしっかり書いてあるわけじゃないんですよ。そして年々新しくなりますし、教室の内容も大きいスペースでは書かれていないので見逃す場合もあります。

〔知事〕
遊び場は書いてありますね。ちょっと分厚過ぎるね、これは。

〔参加者〕
ぱっと見で、見開きぐらいの地図があって、地図に直接色々と書いていただければ、あっここには公園があって､ここにはいろんなものがあるんだって分かりやすいと思います。こうやってめくっていくのは、分かりにくいです。
さらに私、他の地域から来て地域のどの辺に何があるというのが分からないので、住所で書かれてもいまいちピンとこなくて、近い遠いというのが分からないので、目で見てこの辺だったら行けそうというのが分かりますから・・。

〔参加者〕
私たちのサークルで、この辺りの、公園だったり、食事をする所、洋服を買う所とか、そういう行きやすい場所のマップを作って貼ったりはしているんですけど、ここに来ないと見れないのです。電話番号も調べて、地図を作っていたんですけど。

〔参加者〕
　でも、私はこちらに来て１０年近くなるんですけど、今は実はこの創造館があることですごく良くなっている。それは評価しなければいけないと思います。すごくよくなっていて、情報交換もできますし。ただ確かにかなり地域的に偏っていることはあると思います。

〔知事〕
　こういう創造館みたいなものはどんどん造っているんですかね、市町村は。児童館ですよね。国の補助制度はあるんでしたっけ。こういうのを造ったらいいですよね、確かにね。

〔参加者〕
　児童館は船津の横にありますけど子どもがほぼ野放し状態です。逆に富士吉田の児童館のほうが登録制でかなりきっちりやっていて、宿題とかも小学校から帰ってきてそこでさせてくださいます。

〔知事〕
　学童保育ですね。

〔参加者〕
　はい学童保育でやっていますけど、こちら船津の学童というのは学校の隣にあるんですけど、学校とは一切関係ないシステムになっています。

〔参加者〕
　児童館もね、小学校の地域に一つずつあるんですね。勝山なんか素晴らしいですよ、児童館のメニューが。もう本当にお母さんまで教育されていて。町に幾つかあるけれども、その地域によって多少は見直しは必要かもしれませんね。

〔参加者〕
　すみません。子育ての前に産婦人科をちょっと多くしてほしいと思います。私は県立中央病院と医大で出産しているんですけど、ＮＩＣＵというのを郡内にも一つ欲しいと思います。

〔知事〕
　それはそうです。今度、そこの赤十字病院でベッドが１０増えるんですかね。先生が二人確か増えるはずですよ。だからかなり充実するんですね。ＮＩＣＵまでは造らなかったかなと思うんですけどもね。

〔参加者〕
　年をとってから初産する人が年々増えているので、ちょっとまた大月の中央病院とか都留の市立病院も産婦人科がなくなっちゃって、こっちまで来なきゃいけないし。そしてまた富士吉田の市立病院と富士河口湖の日赤病院で手が負えないと、県立中央病院とか山梨

大附属病院、国立甲府病院に行かなくてはいけないので、交通費もかなり掛かるので、ちょっとそこを考えて・・。

〔知事〕
産婦人科の充実というのは大事なことでしてね。それはもうよく分かっているんですけどね、先生がいないんですよ。

〔参加者〕
なかなか難しいのかもしれないですけど、やはり助産師さんにがんばってもらって助産師さんが何人か集まって助産院を建てるというやり方とかはどうなんでしょうか。

〔知事〕
今は助産師さん単独で出産というのは基本的にはやらないんですよね。やっぱり産婦人科のお医者さんがセットでないと。

〔参加者〕
私は助産院で二人目を産んでいるんですけど・・。

〔知事〕
助産院はあることはあるんですよね。

〔参加者〕
ここではなくて静岡の富士宮です。ここから５５分で行きます。

〔知事〕
ベテランの助産師さんのほうが安心できるということがあるようですね。

〔参加者〕
そうですね、初産は病院だったのですが、一人目だったので自分の思うことをなかなか伝えられなかった。本当はこうしたかったのに言われるがまま出産してしまった。そこでやっぱり後悔が残ってしまったので。無事産まれてよくしていただいたんですけど、こう言っておけばよかったなとか、なかなか言えないところをやっぱり助産師さんだと１対１でゆっくりという感じです。

〔知事〕
確かにね。助産師外来なんていうあれがありましてね、助産師さんが病院に何人かいて、そこでそういう妊婦さん常時健診したりとか、そういうことをやる。ただ出産までになるこれからは難しいようですね。

〔参加者〕
里帰り出産にするか、こっちで産むかを早い時期に決めなくてはいけません。私は県外から来ているので、産む場所を妊娠５カ月かそこらで決めてくださいと言われてしまいます。５カ月かそこで決めろと言われてもどうなのかなと思う時もあるんですよね。

〔知事〕
そうですよね。両方予約して、ずうずうしい人はそうする（笑い）。
いやいや、そういうことはしちゃいけませんね。

〔参加者〕
今、産科をやっていない先生がいますよね。その方たちと大きい病院が協力して何時から何時まで空いている時間には来てもらうとか、そういう体制づくりというのをどこかの県で実施しているのをテレビで見たことがあるんですよ。

〔知事〕
なるほどね。それは確かにあり得るんですよね。特に救急なんかについてはそういうことを今段々と、もう個々の病院の救急というのは実際問題もう大変ですからね。そうすると公立病院みたいな所に開業医の先生方が順番で行って、そしてその救急を手伝うという仕組みがありますよね。だからその産婦人科なんかもそういうやり方というのはあるかもしれませんね。

〔参加者〕
それも同じようにできればいいですよね。

〔知事〕
まあここはしかし赤十字病院があり、さらにお医者さんが二人くらい勤務しますからそういう点は恵まれているんですけど、大月とか都留とか、あっちのほうはちょっと大変でしてね、困っているんですがね。

〔参加者〕
一人目を産んでも二人目はちょっと考えてしまうというのが・・

〔参加者〕
上野原の人は大月がなくなったので八王子まで通院するようで。

〔知事〕
そうでしょうね。それはそうでしょう。

〔参加者〕
電車に乗ってその中で産んじゃったらどうしようかなんて聞いたことがあるんですけど。（笑い）

〔参加者〕
長期に勤務できる産科医はいないのでしょうか。

〔知事〕
これは探しているんですけどね、もう本当に産婦人科のお医者さんというのは足りませんね。だから結局は山梨大学で育てていくしかないんですよね。まあ山梨大学の産科にも一昨年、去年かな、一人も入らないんです。それじゃ困るということで県が補助制度をつくりまして、産科医さんになってくれた人には１年間３０万円、何に使ってもいいからあげますとこうして、そしたら今年は２人入ったんです（笑い）。そうやって育てていくしかないんですよね、研修医さんをですね。

〔参加者〕
その先のサポートが必要なんですよね。

〔参加者〕
先生になってお産を扱った時の事故とか、やっぱり先生が何かをしてしまうとそれが評判になってみんな病院に行かなくなってしまうということがあるので。

〔知事〕
そういう点ありますよね。産婦人科というのはそうです。本当に産婦人科のお医者さんというのは大変で、夕方一杯飲んでいても何かあればすぐ飛んでいけなければいけませんからね。

〔参加者〕
同級生で女医がいるんですけど、以前、山梨大で産婦人科を担当していたんですけど、アパートに帰るというのが週に１回あればいいほうだと。

〔知事〕
そうでしょうね。特に若いお医者さんは、公立病院や大学病院なんかに勤めると一番こき使われる年ですからね。もうほとんど大学に居着きになっちゃうでしょう。
まあしかし国のほうもかなり産婦人科医に対しては１回のお産ごとに１万円手当をあげるとか、いろんなことをやってきましたからですね、数年後にはかなり改善してきますけどね、してくると思いますけども、しかし心配ですよね。産婦人科、それから小児科ですね。

〔参加者〕
　あと小児科なんですけれども、乳児医療費が無料になる年齢をあとちょっとあげていただければ・・。

〔知事〕
　こちらは今何歳まででしょうかね。

〔参加者〕
　５歳です。

〔知事〕
　県と同じでね。

〔参加者〕
　入院はともかく、通院をちょっと上げてほしいです。

〔知事〕
　入院が就学前ね。そして通院が５歳まで。市町村によってはそれに上乗せをして、例えば甲府市なんていうのはお金があるからか小学校６年生までやっているんですよね。

〔参加者〕
　やっぱりせめて低学年ぐらいまで一応もらえると楽だなと思うんですけど。

〔参加者〕
　ちょっとの風邪だと病院に行かないで、結局ひどくなって肺炎とか起こして入院というケースを何件か見たことがありますので。

〔知事〕
　窓口無料化に、去年からしたんですけど、したらとたんにやっぱり医療費がどんと増えましてね。まあしかしそれはおっしゃるように充実していかなきゃいけないんですよね。

〔参加者〕
　平成１４年から１７年生まれのお子さんたちの給付金みたいなお話がありますよね。それはどういう基準で決められたのか。それは産まれている人に対しての給付金ですよね。これから産まれる子どもに対しての給付金のほうがすごく私は意味があるような気がするんですよ。国はやっぱり産んで欲しいわけですよね。産みたいんだけども、今、話がでたように二人目三人目を産むということに対してすごいリスクを背負うことになるわけですよね。それなのに、何であの期間だけなのか。

〔知事〕

あれは私もよく分からないんですね（笑い）。確か３、４、５歳でしたっけね。３歳以上ですかね。あれ１歳、２歳だって同じじゃないですかね。お金は確か３万円ぐらいくれるんですよね。その３万６千円が例えば２万円でもいいから０歳、１歳、２歳にもあげたらいいと思うんですよね。あれよく分からないんですが、まああれは国会議員が決めたんですね。

〔参加者〕
国の決めたものは知事さんだったら知っているかと。

〔知事〕
あれは県は関係ないですよ。

〔参加者〕
限定、すごい限定ですよね。

〔参加者〕
知らな過ぎるからそう決めちゃったんですよね。

〔参加者〕
層がすごい限定ですよね。

〔日原 富士河口湖町福祉推進課長〕
国の質疑応答集というのがあるんですが、その中では「０、１、２歳は児童手当に乳幼児加算がされている。小学校は義務教育になると教育費は国などが負担している。３、４、５歳は幼稚園だとか保育園だとか、親の負担で全部持ち出しである。」ということで保育料相当ということで３万６千円というふうにお答えしなさいというようになっております（笑い）。

〔知事〕
なるほど。私もあれよく分からなくてね、どうしてそうなっているのか。そういうことがあるんですね、なるほどね。

〔参加者〕
説明は必要ですよね。その説明を聞けば納得するので。

〔参加者〕
広報を見て、広報だとただその２、３年で終わるけど何年から何年までの人しか書いてないので、その括りはなんだろうと思うんですよね。

〔知事〕
　申請書のところに何かそう書いておけばいいじゃないですかね、大きい字で。本当、何もないからね。

〔参加者〕
　それは継続して来年、再来年も。

〔知事〕
　いや、あれはそうじゃないです。今年だけなんです。本当は継続でね。

〔参加者〕
　給付金と同じ意味ってことですよね。

〔司会〕
　本当にお話はつきないわけですけれども、そろそろ時間となりましたので、最後に知事から今日の感想を含めてあいさつをお願いします。

〔知事〕
　本当にいろんなお話を聞かせていただいて本当に目からうろこが落ちるような思いがしたお話が幾つもありまして、本当にありがとうございました。大変に勉強になりました。しかし皆さん方の思いというのをできるだけ実現するように、その障害の問題とか、そういうことも含めまして一生懸命やっていきたいと思います。
　まあしかしなかなか難しいものだなと改めて思うのは、やっぱりあまりやり過ぎてもだめだしね、難しいですね。しかし一人で子育てを苦労しているお母さん方、外に出てこれない人たちも多いし、そういう人たちを何とか引っ張り出すこととか、色々示唆に富むお話を聞かせていただきまして本当に勉強になりました。
　本当に皆さんありがとうございました。どうか皆様方もがんばって下さい。

〔司会〕
　それでは以上をもちまして『ひざづめ談議』を閉じさせていただきます。